

| | |
|------------------|---|
| Title | J. Thirsk, Economic policy and projects : the development of a consumer society in early modern England |
| Sub Title | |
| Author | 高橋, 裕一 (Takahashi, Hirokazu) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1982 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.52, No.1 (1982. 6) ,p.157- 161 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 批評と紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820600-0157 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

J. Thirsk

Economic Policy and Projects: The Development of a Consumer Society in Early Modern England.

Clarendon Press: Oxford U. P., 1978.

viii + 199pp.

高橋裕一

一
イングランド近世初頭の工業史の分野では、これまで研究の重点が織物類、石炭、鉄等々に置かれてきた。これに対してJ・サースク博士は、そうした主要工業のほかに、新しい工業や新しい種類の職業が出現し、驚くほど多種多様な実用的消費物資が生産されていたことに着目する。本書は、サースク博士がかかる事実をそれ以前の時代には見られなかった新しい事態と受けとめ、その幅広い学殖をもとに掘り下げた結果を集約し、世に問わんとしたものである。イングランド近世の経済社会をめぐっては、歴史研究の重要な分野の一つとして、古くから数々の問題提起がなされてきたが、ここに本書が、今まで本格的に取り上げられなかったのが不思議とさえ思われる主要工業以外の領域に鉄を入れたことは、有益かつ刺激的な討論材料を新たに提供することになる

批評と紹介

う。

著者J・サースク博士は、農業史の碩学として著名であるが、工業史にもきわめて造詣が深く、主として十六・七世紀のイングランド農村社会を、常に農業と工業とのかわりを念頭に置いて実証的に探究していく堅実な学風を培ってきた。当時の工業が、産業革命以降に比べ、はるかに農業と不可分な関係にあったことは周知の通りである。そうしたことからすれば、イングランド近世初頭の広い意味での産業問題を斬新な視角で捉えた本書は、R・アシユトンの書評にもあるように、博士の研究史のうえで一つの「到達点」を示すものといっても過言ではあるまい。

二

十六世紀後半から十七世紀にかけて、イングランドでは、様々な国内向け消費物資を生産する活動が起った。こうした生産活動の計画スキームを著者は、当時の表現を踏まえ、「プロジェクト」と呼んでいる。かかる「プロジェクト」には、例えば、靴下・ボタン・ピン・澱粉のり・リンネル・石鹼・明礬・食用酢の生産、さらに、西洋油菜・亜麻・大麻・大青・タバコの栽培があった(Ch. I, pp. 6-7)。とりわけ、「プロジェクト」の性格をよく伝えるものとして先ず挙げられているのが、靴下の製造と大青の栽培である。著者によれば、これらは、諸「プロジェクト」のなかで、雇用の機会を大量に提供した代表的存在であった(Ch. I, pp. 3-6, Ch. VII, pp. 167-8)。

「プロジェクト」は、雇用創出の場というにふさわしく、著者の論ずるところでは、すでにマンパワーの吸収力を失って飽和状

一五七 (一五七)

態に達しつつあった穀物生産地域を避け、融通性に富む社会機構と広大な土地空間を有する牧畜地域に、農工兼業および家族経営を主たる基盤として発足した。その発足によって副業を得た者の間では購買力の増加が見られ、この豊かな購買力に支えられて増殖を続けた消費財生産の拠点から、空前なほど多様な実用品が生産されることになった。こうして生産された大量の実用的消費財は、十七世紀に顕在化してきた家族の実質収入の増加傾向を背景に、市場都市や行商人層のつくる国内交易網に乗って、イングランド全域の隅々にまで滲透していった(主に Ch. VII)。もはや、廉価な消費財に対する市場が農村を中心に存在していたことは、きわめて明瞭なところとなった。この傾向は、例えば、十六世紀前半に生きた農夫の平均的な家財と、十七世紀後半の農夫のそれを比較することによってもうかがい知られ (Ch. V, pp. 106-110)。かくして著者は、ほとんど全ての社会層が自分の資力に見合った価格と品質を見出すことのできる「消費者社会」が成立した、と強く主張するのである (Ch. I, p. 8, Ch. V, pp. 107-8, 114-6)。

「プロジェクト」は、こうして成立した「消費者社会」に対する消費物資の供給源をつくりだすものにほかならなかったが、これを推進していったのが「プロジェクト」と称される人々であった。十七世紀にいたって、「プロジェクト」のなかには、著者によれば、野心あふれる商人のほか、(ジェントリの長子以外の子弟をふくむ)年季奉公人層といった若い世代までまじるようになり、その構成や事業の実態は複雑多岐にわたっていた (Ch. IV,

pp. 101-5)。とはいえ、「プロジェクト」全体に対する著者の評価は高く、彼らを、例えば、精励勤勉の人、工夫の才、地域振興の貢献者とたたえている。なかならず著者は、彼らが多くの人々に対して生業を与えたという事実を重視し、地域振興への寄与という点に「プロジェクト」の本領を見るのである。著者が、「プロジェクト」と「プロジェクト」を、十七世紀の新たな時代を特徴づけたキー・ワード (Ch. I, p. 1) と位置づけている意味はここにある。

こうした「プロジェクト」の輩出は、著者の論ずるところでは、十六世紀なかば頃からの政府による国内産業育成策が大きく物を言った結果であり、かくして「プロジェクト」は十七世紀にはいって、いわば爛熟期を迎えるにいたる。すなわち、輸入品依存からの脱却をめざす政府の主導で進められた、オランダをはじめとする大陸諸先進国からの技術導入、さらに独占特許権の付与等に力を得て、「プロジェクト」は発展の本格的な軌道に乗ることになったのである(主に Ch. II)。事実として、「プロジェクト」の活動と「プロジェクト」の成果には、豊かな実りを見ることが出来る。これに関連して著者は、例えば、靴下製造が年間十万人の労働力を雇用するほどの隆盛を示していたこと (Ch. I, pp. 5-6, Ch. VII, p. 167-8)、また、開拓の進む沼沢地を中心に大々的に栽培された大麻や亜麻を原料とするリンネル等の生産、およびニュー・ドレイパリー類の普及に著しい進展が見られた(主に Ch. II, III) ほか、その事業範囲をヴァージニアをはじめとして、遠く海外にまでも拡大した「プロジェクト」すら登場し

たこと (Ch. III, p. 77, Ch. IV, pp. 101-3) を挙げるのである。また、十七世紀にいたって急速に発展したユニークな「プロジェクト」として著者が強い関心を払っているものに、ピン、澱粉のり〔ひだ襟えり〕の流行に伴うもの、食用酢および蒸留酒の生産がある (Ch. IV, pp. 78-97)。

しかし、伸長著しい「プロジェクト」の前途に立ちはだかる障害が、その爛熟期のさなかに、とりわけステュアート朝にはいつて、現われはじめた。そうした障害のなから著者が拾っているのは、例えば次のごとくである。負債を抱えた国王が、「プロジェクト」のもたらす財政上の利益に目をつけたこと、「プロジェクト」の成功に伴う莫大な富に魅せられた投機家が出現したこと、資金援助等を通じ、「プロジェクト」の後援者として登場してきた富裕層、すなわち廷臣、商人、投機家の一部が、当初は技術者や職人に限り付与されていた独占特許権を握り、小生産者を圧迫したとこと、そうした特許権所有者の代理人らが小生産者の痛手を顧みず、販売用織物類の検査に参入し、跳梁をきわめたこと、そして、カンパニー制やコーポレーション制の普及に代表される独占の新形態が生じたこと (Ch. III, pp. 51, 59-66, Ch. IV, pp. 97-100) —。しかしながら著者によれば、こうした障害も、独占の規制をほぼ免れた農村に定着しつつ上昇・発展を続ける「プロジェクト」にとって、乗り越えることができないほどの障害ではなかったのである。著者は、国内産業の充実によって、かえって輸入関税減少の懸念が強まった時、国王が、新規に特許権を求める者に対し、輸入関税の減少分をあらかじめ補償するよう要求した

事実を挙げて、「プロジェクト」のはらんでいた投機的性格が、いさう高まったことを指摘しているが (Ch. III, pp. 57-9) こうした事態が何よりも先ず、国内「プロジェクト」の成功ぶりの一端を如実にあらわしていたことは、今さらいうまでもあるまい。

ひるがえって、消費財生産の伸長と、それに伴う農村における工業的副業 (Industrial by-employments) の発達を、当時の経済論者 (Industrial by-employments) の発達を、当時の経済論者はどう見ていたか。新しい事態を前にして多くの論者は、外国貿易による利益を国富の源泉と見ることに代表される従来の経済理論に対し、大幅な修正を加える必要のあることを暗示している。諸論者の見解のうち着目すべき点を、著者は次のようにまとめている。すなわち、外国貿易よりも国内交易の重視、多種多様な実用的消費財生産の奨励、労働集約性の尊重、そして、長期的に見れば単位面積あたりの労働集約密度が高くなる牧畜経営のもつ潜在力の評価 — の四点である (Ch. VI, pp. 133-148)。後になってアダム・スミスが新しい富の学説を確立した際に、一五四〇年から一七〇〇年頃までにこうして発達をとげた経済体系をある程度その基底に据えていたことは、著者の明確に論ずるところである (Ch. VI, pp. 148-155)。

ともあれ、「プロジェクト」の投じた一石は大きかった。「十七世紀を通して、新しい消費財の生産は、それに費やされる国家の経済的資源を年が経つにつれてますます吸収していった」 (Ch. VII, p. 158) のである。一方、「プロジェクト」は、政府の国内産業育成策によりかかりながら「プロジェクト」を押し進めていく。さらに、著者によれば、こうした展開が可能となったそもそ

もの原因は、生活水準の全般的向上のなかにあった。それに関連するものとして、肉類やチーズ等の酪農製品に対する需要増という点が指摘されている。自明のごとく、肉類や酪農製品に対する需要増により、牧畜地域は活況を呈するにいたる。従って著者の行論を追えば、おびただしい数の「プロジェクト」の普及は、こうした事態に呼応して牧畜地域に流入することになった労働力が、牧畜経営と結びついた（副業としての）農村工業に吸収され、有効に経済機構に組み込まれて、その結果、広汎にわたる購買力が発生したという状況と表裏一体をなしていたことが了解されよう（以上、主に Ch. VII）。かくして、「購買力と生産能力は相互に支え合う」(Ch. VII, p. 174) ようになった。著者が、「プロジェクト」の展開をかかる視点で捉えようとするとき、「プロジェクト」と政府の国内産業育成策とのかわりをどう理解していたかは、本書全体に照らして、大凡次のように推察される。すなわち著者は、政府の国内産業育成策を有効に押し進めていくために必要な条件を整備するものとして、「プロジェクト」を位置づけているように思われる。「プロジェクト」の背景にある政府の経済政策が、現実にとれだけの影響を及ぼし、また、どれほどの効果を期待しえたか——。本書を通して著者のめざしたのは、いみじくも表題にもあるように、究極的にはこの点の解明にほかならないのである。

三

以上に内容を要約した本書をめぐっては、先ず、次のような三つの問題点があることを指摘したい。

一、著者は「プロジェクト」を、企業家の性格を備えたものと理解している。彼らは、わずかな資金で「プロジェクト」の現に着手し、急成長をとげた。そうした意味では、反面、「プロジェクト」には、一時しのぎで、長期の存続を期し難いという一面が見られたことも事実であった（以上、Ch. VII, pp. 169-173）。従って、T・S・ウィランも書評で指摘しているが、「プロジェクト」が真の意味で著者のいうような「素材や資源に手を加えてそれを利用・開拓していくための実際的な計画」(Ch. I, p. 1) であつたかについては、なお議論の余地があるように思われる。

二、著者は、国内産業を育成し、あわせて貧民の就業を図ろうとする政府の政策は、トマス・スミスやウィリアム・セシルらエリザベス朝官僚に大きな影響を与えた「コモンウェルスメン」思想の系譜を引くものであった (Ch. I, II) としている。また、そうした経済政策に対し、著者は、「プロジェクト」の推進母体として、一応好意的な評価を与えているように思われる。しかしながら、著者自身の指摘にもあるように、政府の政策のなかには、大都市の外国貿易商人らの要請に沿って商品の品質標準化を図るといった、時流に逆行するものも見られ (Ch. V, pp. 116-8) ；また、「プロジェクト」は、ひとたび軌道に乗った後は、むしろ政府や当局者の目に届かぬところで持続的な成功を見たのである (Ch. VI, pp. 133-4) ；セシルを含むエリザベス朝の政策当局者の間で、関税を操作して国内の未成熟産業を保護しようとした形跡が見られないこと (T・S・ウィラン書評) も考え合わせると、政府の国内産業育成策そのものが必ずしも効率よく機能したとは

考えにくい側面も現われてこよう。ともあれ、本書は、エリザベス朝からステュアート朝初期に及ぶ政府の経済政策が、産業革命にいたるイングランドの産業発展全般に対して持った意味を、あらためて真摯に問いかけている。

三、当然ながら著者は、消費財生産に対する高い評価から、本書をまとめるにいたった。しかしながら、著者も認めているように、本書が、当時の消費財生産を高く評価していいことを納得させるだけの統計データに乏しいことも事実である (Ch. VII, p. 177)。それでもなお著者が、例えば、消費財生産が当時の国民総生産のなかで占める割合を適確に示さんとして統計データの手掛りを求めている (Ch. VII, pp. 175-8) のは、本書をもって切り開いた新分野をさらに深く探究し、十分なる足場を得ようとする著者の意欲のあらわれと受けとるべきであろう。

最後に、本書を通して特に示唆を受けた点を二、三挙げれば、
一、著者の論ずるところ、イングランドが近世初頭に、オランダ、フランス等の先進技術を学びながらも、それら大陸諸国とは異なつて、安価な実用品を大量に生産し、早くも消費財に関する大衆市場の形成期に到達していたとすれば、かかる事実が、西欧社会全体の視野のなかであらためてどう位置づけられるべきか——今後の課題として提起されよう。

二、本書は、「プロジェクト」の飛躍的普及を国内交易の諸問題と不可分なものとして論じており、流通史の分野にも貢献するところがある。その点で著者が、本書公刊に引き続き、イングランド近世初頭における経済活動の展開に「馬」が果たした役割を

取り上げ、ステントン記念講座のパンフレット (J. Thirsk, *Horses in early modern England: for Service, for Pleasure, for Power. The Stenton Lecture, 1977: Univ. of Reading, 1978.*) と同じく「注目」に値する。
しかし、何にもまして、

三、近世イングランドの工業史のなかで、工業製品の「生産」メカニズムに比べ、従来、不当に看過されてきた感のある「消費」メカニズムに焦点を置いて緻密かつ周到な分析が展開されていることが、本書をきわめて意義深いものにしていく。